

ところで、ある百人隊長に重んじられている僕が、病気で死にかけていた。イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いに来て、僕を助けに来てくださるよう頼んだ。（ルカ7：2～3）

イスラエル人は、異邦人は神を知らない「汚れた」民族と見なし、交わることを拒絶していた。口を利かない。まして、家を訪ね、食事をするなどは決してしなかった。

主イエスはみ言葉を求める民衆に話し終えてから、カファルナウムに戻られた。そのカファルナウムに駐屯する百人隊長がいて、彼に重んじられている僕が病になり、死にかけていた。彼は、主イエスは病人を癒やしていると聞き、ユダヤ人の長老たちを使いに来て、僕を助けに来てくださるよう頼んだ。これは、常識ではあり得ないことである。ユダヤ人と異邦人のローマの百人隊長とは関係を持ち得ないことであったからである。しかし、百人隊長は、信頼する僕を何としても助けたかったから、主イエスに癒しを求めたのである。その求めをユダヤ人の長老たちに頼んでいる。ローマの軍隊は、ユダヤ人の住む所に駐屯し、横柄に振舞っていたので、ユダヤ人はローマ兵を嫌い、憎んでいた。しかし、百人隊長は、ユダヤ人に受け入れられ、愛されていた。長老たちは、百人隊長の求めに応じ、主イエスのところに来て、「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。私たちの国民を愛し、会堂を建ててくれました」と言って、熱心に癒しを願っている。主イエスは、彼らの願いに応え、百人隊長の家に向かわれた。異邦人の家に向かう光景も、当時の常識からは考えられないことであった。百人隊長の家からあまり遠くない所まで来ると、百人隊長は友人を送って、「主よ、ご足労には及びません。私はあなたをわが家にお迎えできるような者ではありません。それで、私のほうからお伺いすることもいたしませんでした。ただ、お言葉をください。そして、私の僕を癒やしてください」と言わせた。百人隊長は、ユダヤ人は異邦人とは交わらないことを知っている。そして、権力を奢る百人隊長とは思えない、へりくだった思いで、主イエスに言葉による癒しを懇願している。彼は続けて、「私も権威の下に服している人間ですが、私の下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、僕に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします」と言った。軍隊は上官の命令には従う上意下達の制度が徹底している。百人隊長の言う通りである。主イエスは、彼の言葉を聞いて驚き、群衆の方を振り向いて、「言うておくが、イスラエルの中でさえ、これほどの信仰は見たことがない」と言われた。主イエスは、百人隊長の言葉から、イスラエル人の神の言葉は発せられたら、その通りになるという神の言葉への信仰と重ね合わせて、褒められたのではないか。私は、神の言葉の権威と軍隊の上意下達の命令を同列に置くことに、少なからず違和感を持つが、主イエスは、そのように語り、群衆に神の言葉への信頼を説いたのであろう。

主イエスが、「これほどの信仰を見たことがない」と言われると、使いに来た人が家に帰ってみると、僕は癒され、元気になっていた。著者ルカは、主イエスの言葉には場所を超えて、癒やす力があつたと伝えている。

イスラエル人は「清い」と「汚れ」を分別し、汚れに触れないで、清さを保とうとした。主イエスは汚れた異邦人の百人隊長の求めに、何の抵抗もなく応え、僕を癒やされた。主イエスが現わした福音は、清いと汚れの垣根を取り除き、全てを清いとしたことである。